

■R.シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」Op.40

《系図》が初演されたのは武満が亡くなる前年だったのに対して、交響詩《英雄の生涯》が作曲されたのはリヒャルト・シュトラウス（1891-1953）が34歳の年である。ここで描かれている「英雄」とは作曲家自身である。当時、ベルリンの宮廷歌劇場第1楽長に就任したばかりで、作曲家としても交響詩のジャンルで力を発揮し、確かにドイツの音楽界では注目を集める存在となっていた。とはいえ、「英雄」を思い描きながら、自らの人生体験を織り込んで、ひとりの人間のドラマティックな生涯を描いた自画像的な作品を書き上げたことには、並々ならぬ自信を感じさせる。

交響詩《英雄の生涯》の初演は1899年である。そのころ、交響詩はブラームス一派の守ってきた交響曲の形態に対して、いわゆる伝統的な形式を破り、文学的な内容を奔放に描いた音楽だと考えられていた。実際、純粋な器楽曲を至上のものとするブラームスらは、リストやワーグナーらの標題音楽に反感を抱いていたわけだが、当面は完成された作品の形式の不備を批判の対象としている。

だが、じつはR.シュトラウスの交響詩は古典的な調性と古典的な形式と深く結びついている。《英雄の生涯》も例外ではない。広範な並行調を含んでいること、それをソナタ形式のパターンと重ねていること、さらにベートーヴェンの「英雄」交響曲になぞらえたのか、「英雄の主題」が変ホ長調となっていることなど、古典を踏襲した特徴をいくつも指摘することができる。ソナタ形式の主題呈示部の第1主題部にあたるのが第1部「英雄」で、冒頭に「英雄の主題」が鳴り響く。弦とホルンによって呈示されるこのテーマがソナタの第1主題にあたる。ちなみにホルンはシュトラウスが好んで用いる楽器の一つ。男性的なイメージをかきたてる。第2部「英雄の敵」はソナタ形式の推移部にあたり、ト短調を基盤としながら、調性が一つに定まらないパッセージが重ねられる。木管楽器の不安定な楽想が批評家の敵意を表している。彼の交響詩を批判してきた保守的な批評家ハンスリックらを揶揄したものか。しだいに数が増えていき、混乱してくると、「英雄の主題」が短調ですがたをみせ、作曲家の落胆を伺わせる。

第3部「英雄の伴侶」がソナタ形式主題呈示部の第2主題部で、独奏ヴァイオリンが奏でる優美なメロディが「英雄の伴侶の主題」である。これはホ長調で書かれていて、変ホ長調の「英雄の主題」との応酬が聴かれる。「愛の二重唱」は変ト長調。だが、まもなく遠くから変口長調で敵の嘲笑がきこえ、戦いの兆しが現れる。

第4部「英雄の戦場」は展開部にあたる。トランペットのファンファーレで宣戦布告。短調と長調を行き来する転調が行われ、リズムが激しくなって、全体の中でもとりわけ緊張感のある音楽が繰り広げられる。敵に対して、英雄はみごとな勝利をおさめる。

第5部「英雄の業績」が再現部で、提示部と呼応して、変ホ長調と口長調の安定した楽想が続いていき、ト長調と変ト長調で自らの業績が回想される。交響詩《ドン・キホーテ》、《ドン・ファン》、《ティル》、《死と変容》、《マクベス》、《ツアラトウストラ》や歌劇《グントラム》などの主題がポリフォニックに織り合わされていく。主調の変ホ長調へ戻るところからが第6部「英雄の隠遁と完成」。第一線を退いて、コールアングレの象徴するのんびりとした田園で、伴侶とともに暮らす様子が描かれている。この部分がソナタ形式の終結部となる。こうして34歳で自分の晩年までを想像したR.シュトラウスは、20世紀に入って、この交響詩とそう遠くない生涯を送ったのである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート 3、ピッコロ 1、オーボエ 4（イングリッシュホルン持ち替え 1）、クラリネット 2、E♭管クラリネット 1、バスクラリネット 1、ファゴット 3、コントラファゴット 1、ホルン 8、トランペット 5、トロンボーン 3、テノールチューバ 1、バスチューバ 1、ティンパニ、バスドラム、シンバル、スネアドラム、テナードラム、ハープ 2、弦五部

※スコア上の表記